

【シンポジウム】文学部で学ぶということ—国士館大学の場合—

2012年11月10日（土曜）午後1時～3時（於：34号館B-301番教室）

提題者 石橋 崇雄（東洋史学専攻）

江川 陽介（教育学専攻）

青木 聡子（初等教育専攻）

国士館大学文学部と《漢学》の伝統 —『東洋道德教本』と『樹人』から—

石 橋 崇 雄

はじめに

2009（平成21）年から文学部人文学会が主催しているシンポジウムにおける今回のテーマは、「文学部で学ぶということ—国士館大学の場合—」となった。

国士館大学の文学部が法学部と共に創設されたのは1966（昭和41）年4月のことである。その経緯については、湯川次義「文学部小史」（『樹人—大学の華・文学部のすべて〈平成六年度保存版〉』平成6年3月、5～12頁）に詳しい。これによれば、国士館が1966年に創立50周年を迎えることから、1953年設立の短期大学（当初は国文・経済の2科、56年に体育科増設）に続いて1958年に創設した4年生大学（当初は体育学部のみ、61年に政経学部、63年に工学部、65年に政経学部Ⅱ部を増設）の学部をさらに増設し、総合学園に拡充させようとする意味があった。創設当時の文学部は、教育学科に教育学専攻と倫理学専攻、史学地理学科に国史学専攻（現、考古・日本史学専攻の前身）と東洋史学専攻と地理学専攻（現、地理・環境専攻）、文学科に漢学専攻（現、中国語・中国文学専攻）と国語国文学専攻（現、日本文学・文化専攻）という組織からなる3学科7専攻体制であり、創設された翌年の1967（昭和42）年4月には国史学専攻に考古学コースが、また1969（昭和44）年4月には教育学科に初等教育専攻が増設され、現在の3学科8専攻の体制になった。『国士館大学』第四十八号に残されている3学科それぞれの目標は、「有能な教育者や社会の広い分野で活躍できる実力者の養成を使命とし、各種思想体系の分析的認識、論理的思考力を養うとともに、諸資格の取得を目指すことをねらいとする」（教育学科）、「各分野の実証的研究を行い、事物の意義を把握し、歴史と地理の正確な理解の上に、日本の伝統と国土を愛し得る人物を育成するとともに、実力ある教員の育成にも重点を置く」（史学地理学科）、「漢学・国文学の古典の研究を通じて、東洋と日本の伝統ある精

神を理解し、人間英知の最高峰の一つである東洋の格調高い詩文と道徳観を現代に再生し、現代文学にも研究視野を置くことを目標とする」(文学科) ことにあったという。

それでは、このようにして誕生した国士舘大学文学部の特色ならびに個性とはどのようなものであったのだろうか。こうしたことに裏打ちされて培われてきたはずの国士舘大学文学部の独自性について、現在そこに在籍している学生諸子からはどのように把握あるいは理解されているのであろうか。

国士舘大学文学部のこうした特色・個性は、文学部の創設と同時期に編修された『東洋道徳教本』前編・後編(1967年、当時の柴田徳次郎国士舘大学総長が発行者)にも打ち出されており、実は国士舘大学創立時に構築されていた「建学の根本理念」と直接に繋がるものであったことがはっきりと窺える。それでは国士舘大学文学部で何を学ぶことができるのか。ここでは<漢学>の伝統という視点から些か言及してみたい。

ただ、あくまでもシンポジウムである。提題者としては、参加された学生諸子にいろいろと考えていただけるように「問題の所在」を整えて判りやすく示すことに第一の責務があろうと捉えている。冒頭に記した今回のシンポジウムにおける基本テーマを熟考した結果、やはり所属専攻における視点からの提起だけでは「学部としての問題として不十分」であろうし、万が一にもこれが所属専攻としての宣伝、あるいは自画自賛の自慢話などに陥って終わるようであれば、それこそ、学部が主催する大学のシンポジウムとしての意味も意義も全く理解していないことになろうと愚考した。そのため、国士舘大学における伝統とはそもそもどのようなものであったのか、その国士舘大学文学部における伝統とは何であるのか、現在その文学部に学籍を置いて学ぶことの独自性とは一体どういうものなのかという点に絞り込み、「国士舘大学文学部と<漢学>の伝統—『東洋道徳教本』と『樹人』から—」という視点から問題を提起することで、その責を果たしたいと考えた次第である。

一、「国士舘大学文学部」の独自性

では何故、主題が「国士舘大学文学部と<漢学>の伝統」であり、「『東洋道徳教本』と『樹人』から」という副題が付されているのか。事前告知の段階からこのテーマを目にされて、国士舘大学における伝統、国士舘大学文学部における伝統、文学部に学籍を置いて学ぶことの独自性に関する「問題の所在」が一体どのように提示できるというのか、単なる時代錯誤ではないのか、など、さまざまな疑問を持たれた方も多いのではなかろうか。

ここで学校法人「国士舘」創立時におけるそもそもの教育理念と目的、すなわち「建学の精神」に思いを馳せていただきたい。現国士舘大学に7学部、大学院

に10研究科があるなかで、文学部の設置が1966（昭和41）年、人文科学研究科（修士）の設置が2001（平成13）年である（『国士館要覧2013』「歴史（年表・設置学校の変遷）」平成25年7月、36～39頁）ことから、ともすれば文学部は新たに増設された後発の学部と思われがちである。実際そのような学内の声もよく耳にする。しかし、それは大きな誤解と言わざるを得ない。1917（大正6）年における国士館創立の目的は、大正デモクラシーの潮流を背景とする社会情勢に対して、「日本の精神をもち社会や国家を支え、世界の平和と発展に貢献する<国士>を養成すること」にあった（湯川「文学部小史」5頁）。とりわけ太平洋戦争以前の1936（昭和11）～1938（昭和13）年に国士館専門学校における剣道・柔道・国語・漢文の学科に「中等学校教員無試験検定の特典」が付されていたことから知れるように、「武道」・「国文学」・「漢学」を修める「文武両道の国士」としての教員養成に主たる目的を置いていたのである（同6頁）。「武道」・「国文学」・「漢学」は国士館創立時からの教育理念と密接に繋がる3本柱の主要科目であり、このうちの「国文学」と「漢学」が現在の国士館大学文学部に直接に繋がる専門科目そのものであることについて、特に新たな説明は要しないであろう。

文学部の独自性に言及する一環として、国士館における「漢学の伝統」に繋がる特性を採り上げた理由は、この点にある。国士館における「建学の精神」それ自体が現在の国士館大学文学部における「国文学」と「漢学」に関わる専門科目なしには全く実現され得ないということ、その根幹に裏打ちされた国士館における大学文学部の意味と意義とを広く再認識していただきたいと考えたからに他ならない。

ところで、わが国の中国哲学を代表する研究者の一人である金谷治氏は『孟子』（新訂・文庫・再録版、朝日新聞社、中国古典選8、1978年）の翻訳に付した解説の中で、『論語』と『孟子』をはじめとする中国の古典と1945年以降の日本との係わりについて、

『論語』とならんで、『孟子』の名はあまりにも有名である。それは、儒教の真髄を伝える書物として、中国はもとよりのこと、わが国でも、つい先きごろわれわれの祖父の世代までは、必須の教養図書であった。（7頁）

けれども、これまでがそうであったからといって、それで無理おしにおしとおせる時代は既に過ぎ去った。『論語』にしても『孟子』にしても、その内容が、人類の文化的遺産として、また今日の教養として、価値のないものであるなら、さっさと捨てればよい。一九四五年の終戦は、そうした真実の批判をあらためて行なわせる機会となったのである。まことに、終戦後の社会は、古典に対して冷ややかであった。しかし、そうした古典への愛情を持たない冷たい風のなかにあっても、真に価値の高い古典は決して消えさることはない。『論語』や『孟子』の内容が、いわゆる封建倫理を支持する要

素を持つことは事実であるが、それにもかかわらず、多くの有益なものをわれわれに与えてくれることも、いなむわけにはゆかない。今日のわが国において、一人でも多くの人がこれらの書に接することは、やはりきわめて必要なことなのである。(7頁)

利益にはしる現実主義的な世俗に対抗して、声高く道徳の重要性を強調し、道徳によって世界の真の平和をかちえようとした理想主義的な歩み、それこそが孟子という偉大な人格の歩みである。道徳の危機ということが、今日の時代についてもよくいわれるが、『孟子』の書をよんで以上のような人格にふれ、道徳の再建につくした彼のはげしい熱情を感得するならば、われわれもまた新しい倫理への意欲をあおられる。二千年以上の歳月をこえて、なお生々しいこの共感こそ、まことに『孟子』の古典としての価値でなくて、何であろう。(9～10頁)

その思想は、要するに、孔子の仁をうけついで仁義の道徳を中心としている。孔子の唱えた仁は、愛情を主とした自然な上官に本づく徳で、「近きより遠きに及ぼす。」つまり、肉親に対する真情を次第に社会にも及ぼしてゆくのを、原則としていた。ところが仁の徳が、はっきりした愛としての性格を強調されてゆくにともなって、現実の差別相に調和的に応じてゆく、「近きより遠きへ」という原則が忘れられ、ついには、自分の肉親も他人の肉親も、隔てなく愛してゆこうとする無差別愛、兼愛を唱える墨翟の学派なども起こった。孟子はこれに対抗したのである。もとより、孟子とても仁を愛とみているが、それを無差別の愛と解して極端に走ることが、どのような過ちを犯すか。つまり孔子の真意といかに離れてゆくか、それを孟子はわきまえたのである。「仁は人の心なり。」仁はわれわれに自然なもちまえとしての愛情から発する。しかし、「義は人の路なり」で、その仁の徳を実践してゆくについては、必ず義の徳の助けをかりねばならない。親疏・長幼・自他の分別から貴賤・貧富に至るまで、現実の差別相にに応じて、それに適合した態度を決定する徳、それが義であった。孟子はそれを強調して、仁の差別愛としての性格を明らかにし、墨家の無差別愛すなわち兼愛をうちやぶろうとしたのである。(21～22頁)

と述べている。ここにみえる1945年を境に始まる極端なアメリカ偏重主義から生じた「利己的自由主義」と「誤まった無差別愛」に対する危惧は、何もこのような学外の言を長々と引かなくても、わが文学部における独自性と伝統の中にはっきりと示されている。

文学部では1991(平成3)年から随時、『樹人—大学の華・文学部のすべて』と題する冊子を学生諸子のために作成してきた。その「平成六年度保存版」の巻頭に収録されている「『国士館大学文学部』の独自性」(廣野行甫国士館大学名誉

教授、当時は文学部長・教授)には、

一体、日本の今日の繁栄には、教育の力が大きく寄与している。とりわけ大学教育における広く深い教養と、高い専門性と独創性の涵養による、政治・経済・科学技術等の発展と国の繁栄とに果してきた役割は極めて大きい。

しかしこれは、欧米に追いつけ、追い越せを合言葉に、大学の制度も、教育研究内容も、欧米の模倣に終始したものであった。それはそれで大きな成果をもたらし、それによって我々日本人は豊かさを享受することができている。そして現代でも、イギリス・アメリカは、大学教育では世界をリードしていて、それに負うところも多大である。

しかし、日本の社会的、歴史的、国際的背景を考えた時、ただ欧米の模倣だけでよいのであろうか。

どのような学問でも、全体を捉え、根本を逃さないことが最も基本的なことであり、重要なことである。現今の学問の進歩と、水準の高さは、まことに目覚ましいものがあるが、とかくすると、分析にばかり流れ、科学技術にばかり眼が向けられて、総合して一つの体系を作り上げるという段階にまで到達し得ない嫌いが無いではないように思えてならない。断片的な知識の集積や分析はなされても、人間としての本当の英知の獲得にまで至らなければ、真の教育、研究の目的は達成できないのではないか、そして、人類の本当の幸せは、豊かさはないのではないか。

そこで、本学の創立者達は、東洋文化の真髓を研究して、これを日常の変化の中に活用しながら、東洋的英知を身につけ、日本的個性を確認し、その上で“東西の文化を融合統一して新しい文化を創造樹立”しなければならぬと考えて、本学文学部を創設したのではなかろうか。

だから、文学、史学、哲学の基本の学問体系の上に三学科八専攻が設置されているが、残念ながら英米文学や西洋史といった分野がない。東洋的なものに偏っている、といった批判もある。しかし、これがまた本学文学部の特色でもあり、個性でもあろう。(2～3頁)

とある。また「平成十九年度版」に収録された「文学部の現状と将来」(藤田忠国土館大学名誉教授、当時は文学部長・教授)には、

このように我が文学部は、主に、人文科学の三分野、文・史・哲をもって構成しているが、地理・環境専攻においては自然科学を一方の柱としているし、倫理学専攻においては、社会科学の方法論を学ぶことを必須科目にしている。また考古・日本史が国は国際政治、日本文学・文化専攻には西欧文学との比較文学の専門家を抱えている。また、文学部には教育学専攻のほか、初等教育専攻をもって、初等教育の全教科目の専門家をもっているなどは他大学には見られないところである。

我が文学（部）の理念を改めていえば、東洋文化を基本に見据えて、大学の使命である深遠な学術を教授研究して、知的生産の実をあげ、豊かな教養と高潔な人格を養い、文化の創造・文明の継承の力をつけ、人類の福祉の増進に貢献し、国際社会の進展に寄与する人材を育成することである。（224頁）

とある。繰り返すならば、国士館大学文学部の独自性とは、「東洋文化の真髓を研究して、これを日常の変化の中に活用しながら、東洋的英知を身につけ、日本的個性を確認し、その上で“東西の文化を融合統一して新しい文化を創造樹立”すること」であり、「東洋文化を基本に見据えて、大学の使命である深遠な学術を教授研究して、知的生産の実をあげ、豊かな教養と高潔な人格を養い、文化の創造・文明の継承の力をつけ、人類の福祉の増進に貢献し、国際社会の進展に寄与する人材を育成すること」にある。ここからは、国士館における「建学の精神」を実現させるための基盤として不可欠な要素であることがはっきりと見てとれる。と同時に、「建学の精神を継承する国士館教育」（平成二四年度学長講話資料）の巻頭に示されている「建学の由来と理念」、それに続く「国士館建学の精神・基本理念などの現代的表現」（1頁）の記載は、国士館創立当時における建学の精神・建学の基本理念・教育指針とは些か変わってきていることに気付かれるであろう。学生諸子にはその変化をどのように考えていただけるのであろうか。

国士館大学文学部における特性のうち、教育学専攻、初等教育専攻をめぐる提題は別に用意されていることに鑑み、次には、国士館における「建学の精神」と直接に繋がる大学文学部の特色・個性について、〈漢学〉の伝統という視点から今一度、確認してみたい。

二、『東洋道德教本』の「序」

文学部創設と時を合わせて編修された教材に『東洋道德教本』前編・後編（1967年3月、発行者は当時の柴田徳次郎国士館大学総長）がある。その巻頭にみえる当時の柴田徳次郎国士館大学総長による「序」をみると、そこには、

「明治に学び、明治の上に」とは、本学の掲げる教育理想である。思うに明治維新は、旧来の陋習^{ろうしゅう}を一新し、知識を世界に求めて、有史以来の改革を行ない、もって国運の隆昌^{りゅうしょう}をもたらすに至ったが、そのこれを致せるものは、実にわが国民が民族的伝統精神を堅持して諸外国の文化を摂取したからにはほかならない。しかるに戦後の諸改革を見るに、その趨^{おもむ}くところ、伝統的美風は失われ、国民的自覚すら喪失するの流弊^{りゅうへい}を見るに至った。科学の進歩は見るべきものがあるが、精神文化の面に至っては、誠に憂慮にたえないものがある。これを明治の維新に比すれば、その国民精神において天地霄壤^{しょうじょう}の差があり、今にして国民精神の涵養^{かんよう}を図らなければ、祖国の前途は暗澹た

るものがある。本学園が、その教育理想として「明治に学び、明治の上に」と掲げる所以は、まさに思いをここに致せるものにほかならない。

思うに、国民精神の涵養を図る方途は、わが国古来の民族的伝統精神を理解することに存する。わが国が夙に漢学を輸入し、その長を摂取して、わが国の文化を形成し、わが国民道徳を培養して来たことは、改めて論ずるまでもないことであり、今日漢籍古典が、わが国の古典として尊重されるのも、まさにこの故である。されば、わが国古来の伝統的国民精神を理解するには、先ずもって漢学の精神を明らかにしなければならない。しかも漢学の研究は、ひとりわが国の過去の文化と伝統精神の理解に役立つばかりでなく、新文化を創造し、新国民道義の樹立に資すること極めて大であることを確信する。本学園が昭和四十一年度より、大学文学部に漢学科を創設せる所以はここに存するものであり、今ここに「東洋道徳教本」前後二編を編修する所以もまたここに存する。本書により、広く東洋道徳本来の姿とわが国民精神の基づくところを理解し、もって新文化の創造と新国民道義の建設に資せられんことを切望してやまない。

昭和四十一年十一月三日

国士館大学総長柴田徳次郎

とあり、「国士館の掲げる教育理想」と文学部とが深く繋がっていること、その反映としてこの教材が編修されたことがはっきりと打ち出されている。実際、その巻頭に示されている「凡例」から抜粋してみても、

一、本書は、漢籍古典及び著名な漢詩の中から、東洋道徳の涵養に資すべきものを精選した。

一、本書は、前後二編より成り、主として高等学校及び大学の一般教養用として編集した。

一、本書の編修は、専ら本学文学部漢学科教授陣に委嘱したものである。

とあり、ここからも国士館における「建学の精神」の実現に不可欠な「漢学」の伝統と直接に繋がる大学文学部の特色ならびに個性が窺えよう。

そこで、実際に『東洋道徳教本』の扉を開けてみたい。

三、『東洋道徳教本』目次

先ずは、その目次から窺える本学における「教育の理想」である。前編、後編の構成を示すと、

「前編」 一、立志 二、勸學 三、孝悌 四、交友 五、改過
六、忠恕 七、慎獨 八、慎始 九、言行 十、國士
十一、感懷 十二、詠史

「後編」 一、修己 二、誠 三、謙虚 四、大丈夫
 五、廉恥 六、報本反始 七、五倫 八、五常
 九、正名 十、治人 十一、天命 十二、問適
 十三、勸學

とあり、で囲んだ章がとりわけ注目されよう。なお、前編の「二、勸學」と共に、後編にも「十三、勸學」が設けられているのは教育上の配慮であろうか。それはともかく、前編の「七、五倫」と共に、後編にも「八、五常」が設けられているところに、儒教の根本が反映された国士館における「教育の理想」を見てとることができよう。いま試みに、諸橋徹次『大漢和辞典』（大修館書店）で「五倫」の項目を引いてみると、

五常・五典の①と同じ。五教を見よ。（巻1、514頁）

とある。次に「五典」の項目を引いてみると、そこには、

①人のふみ行ふべき五つの道。五常。五倫。書經、舜典に慎徴=五典、五典克従とあり、舜典の此の五つの人の道を解するに、二説が對立してゐる。一は左傳の「父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝」とするものであり、二は孟子の「父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り」とするものである。…（巻1、502頁）

とある。そこには、「人のあり方」としての「礼節」をみつめ、「礼節」による人間形成のための「学問のあり方」を問う、国士館の目指す「教育の理想」における明確な方向性が窺えよう。

次には、『東洋道德教本』によって漢学の古典そのものに踏み込んでみよう。

四、『論語』「子路 第十三」

先ずは、国士館という名称に関わる「国士」における「士」をめぐる問いで、『論語』によるものである。以下、返り点を付しただけの原文、書き下し文、読解の順に示すことにしたい。通常であれば、そのあとに拙訳と解釈を示すべきところであるが、シンポジウムにおける提題という意味から皆さんにいろいろと考えていただくことを期待し、敢て拙訳と解釈は省いてある。

○子貢問曰、「何如斯可謂之士矣。」子曰、「行己有恥、使於四方、不辱君命、可謂士矣。」曰、「敢問其次。」曰、「宗族稱孝焉。鄉黨稱弟焉。」曰、「敢問其次。」曰、「言必信、行必果、硜硜然小人哉。抑亦可以為次矣。」曰、「今之從政者何如。」子曰、「噫、斗筲之人、何足算也。」

○子貢問いて曰く、「何如ぞ斯れ之を士と謂うべきや」と。子曰く、「己を行うに恥じ有り。四方に使いして君命を辱めざるを士と謂うべし」と。曰く、「敢えて其の次を問う」と。曰く、「宗族は孝を稱す。郷黨は弟を稱す」と。

曰く、「敢えて其の次を問う」と。曰く、「言必ず信、行い必ず果、^{こうこうぜん} 經^こ 確^こ 然^{ぜん} として小人なる哉。抑亦以て次と爲すべし」と。曰く、「今の政に從^{まつりごと}う者は如何」と。子曰く、「噫、斗筭の人なれば、^い 何ぞ算^{としよう}うるに足らんや」と。

- 子貢が孔子に「どういう条件を備えている者を士（国務を遂行できる優れた官吏）と謂うことができるのでしょうか」と質問した。孔子は「自分が行動を起こすのに羞恥を生むような行動はしない。また四方の国々に使者として派遣された時には君命を充分に果たして君命を辱めることがない。こういう者であれば士と謂ってよろしい」と答えた。そこで子貢が更に「その次に位置する条件をお尋ねしてもよいならば、お訊ね致したく思います」と質問した。孔子は「宗族（一族 → 家）の者となれば、親に対する孝の道徳をそなえている者を謂う。また郷や党といった地域の者となれば、兄弟における友愛の道徳をそなえている者を謂う」と答えた。そこで子貢が更に「もう一つ次に位置する条件をお尋ねしてもよいならば、お訊ね致したく思います」と質問した。孔子は「言葉に必ず信頼がもてて、行動が必ず果敢な者であれば、いささか窮屈で角張った小人物ではあるが、その次に位置する者としてもよろしい」と答えた。そこで子貢が更に「今の為政者たちはどうでしょうか（士と謂うことができますでしょうか）」と質問した。孔子は深い嘆息の声を発して「あゝ…ひどすぎる。器量のごくごく小さな輩ばかりで、比べる対象として測ることすらもできない」と答えた。

さて、如何であろう。国士館に在籍している皆さんとしては、「国士」における「士」についてどのように解釈し、またその教えについてどのような疑問や問題を抱いているのであろうか。

五、『東洋道徳教本』前編…「三、孝悌」

次は、『論語』にみる「孝」をめぐる問いである。ここでは、「孝」の実践をめぐる解釈が様々に分かれていることに注目すべきであろう。

- 子游問^レ孝。子曰、今之孝者、是謂^二能養^一。至^二於犬馬^一、皆能有^レ養。不^レ敬、何以別乎。（『論語』「為政 第二」）

- 子游、今の孝は、是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで、皆能く養ふこと有り。敬せずんば、何を以て別たんや」と。

* 解釈① 今日、「孝」とは親を養うことができることだとしている。しかし、人間は犬や馬にも食料を与えて養っているのではないか。親に対する敬いの心がなければ、犬や馬への愛情となんら区別がなくなってしまう。

* 解釈② 今日、「孝」とは親に奉仕することができることだとしている。しかし、犬や馬ですら人間に奉仕しているのではないか。親に対する敬

いの心がなければ、犬や馬による人間への奉仕となんら区別がなくなってしまう。

○孟武伯問_レ孝。子曰、父母唯其疾之憂。(『論語』「為政 第二」)

○孟武伯、孝を問う。子曰く、「父母は唯だ其の疾を之れ憂ふ」と。

*解釈① 両親には病気のことだけを心配してもらうようにしなさい。(父母をして…憂えしむ。)

*解釈② 両親とは、子供が病気をしやしないか、そのことばかりを心配しているものだ。

*解釈③ 子としては何よりも、父母の健康をこそ憂慮していなければならぬ。(父母には…)

「参考」…『論語』に収められている今ひとつの「孝」

○子夏問_レ孝。子曰、色難。有_レ事弟子服_二其勞_一、有_二酒食_一先生饌。曾是以爲_レ孝乎。(『論語』「為政 第二」)

○子夏、孝を問う。子曰く、「色難し。事有れば弟子其の勞に服し、酒食有れば先生に饌す。曾ち是を以て孝と爲さんや」と。

*解釈① 親の顔色をみて其の意向を読んで先に先にと行動することは難しい。

*解釈② 親に対していつも穏やかな顔色でいることこそは難しい。

如何であろう。様々に解釈されている「孝」の実践をめぐる教えについて、どのような疑問や問題を抱いているのであろうか。

六、『孟子』「離婁篇 第四上」

次は、『孟子』にみる「人のあり方」をめぐる議論である。

○(…今惡_二死亡_一而樂_レ不_レ仁。是由_二惡_一醉而強_二酒_一)

孟子曰、愛_レ人不_レ親、反_二其仁_一。治_レ人、不_レ治、反_二其智_一。礼_レ人、不_レ答、反_二其敬_一。行有_二不_レ得者_一、皆反_二求諸己_一。其身正、而天下歸_レ之。詩云、永言配_レ命自求_二多福_一。

○孟子曰く、「人を愛して親しまれざれば、其の仁に反れ。人を治めて治まらざれば、其の智に反れ。人を礼して答えられざれば、其の敬に反れ。行なひて得ざる者有れば、皆諸を己に反求せよ。其の身正しければ、天下之に帰せん。詩に云ふ、『永く言(われ)命に配し自ら多福を求む』と」と。

○孟子が、「人に親愛の情を示しても相手からは親愛の情を示してもらえない場合には、自分の仁愛がまだ足りないのではないかと反省せよ。人を治めてもうまく治まらない場合には、自分の智慧がまだ足りないのではないかと反省せよ。人に礼を尽くしながらも相手からは礼を尽くしてもらえない場合には、相手を敬う自分の心がまだ足りないのではないかと反省せよ。自分の行動が自分の思うような結果に結びつかない場合には、いつも皆そ

の原因は自分の至らなさにあるのではないかと反省せよ。自分が正しいのであれば、天下（世の中）の人々は自分に帰服するものなのである。『詩経』にも『永くひたすら天命に一致させるように我が身を正しくするように気を配り、それによって大きな幸福を求めてゆく』とある。」と答えた。

〔参考〕…（…孟子曰く、…孔子曰く、『道は二つ、仁と不仁とのみ（積極的に仁徳を行うのでなければ、それは不仁になる）』と。…孟子曰く、「（夏・殷・周）三代の、天下を得しは仁を以てし、その天下を失いしは不仁を以てせり。国の廢興存亡する所以のものも、亦然り。天子不仁なれば四海（天下）を保んぜず。諸侯不仁なれば社稷（国）を保んぜず。卿大夫不仁なれば宗廟（家）を保んぜず。士庶人不仁なれば四体（身体）を保んぜず。今、死亡を惡みながら而も不仁を楽しむは、これ由お酔うことを惡みながらも而も酒を強うるがごとし」と。）

ここでは如何であろう。『孟子』にみる「人のあり方」をめぐる教えについて、どのような疑問や問題を抱いているのであろうか。

七、『顔氏家訓』…「学問のあり方」

そして最後は、北齊の顏之推（531～591？）による『顔氏家訓』における「学問のあり方」である。なお、北齊を考える際には、東魏、北周、隋との関わりに留意しなければならないことは、言うまでもない。

○夫學者、所_レ以_レ求_レ益耳。見_レ人讀_レ数十卷書_レ、便自高大、凌_レ忽長者_レ、輕_レ慢同列_上。人疾_レ之如_レ讎敵_レ、惡_レ之如_レ鴟梟_レ。如_レ此以_レ學自損、不_レ如_レ無_レ學也。古之學者爲_レ己、以補_レ不_レ足也。今之學者爲_レ人、但能說_レ之也。古之學者爲_レ人、行_レ道以利_レ世也。今之學者爲_レ己、修_レ身以求_レ進也。夫學者、猶_レ種_レ樹也。春玩_レ其華_レ、秋登_レ其實_レ。講論文章、春華也。修_レ身利_レ行、秋實也。

○夫れ学は益を求むる所以のみ。人の数十卷の書を読み、便ち自ら高大にして、長者を凌忽し、同列を輕慢するを見る。人、之を疾むこと讎敵の如く、之を惡むこと鴟梟の如し。此くの如く学を以て自ら損なわば、学無きに如かざるなり。古の学ぶ者は己の爲にし、以て足らざるを補うなり。今の学ぶ者は人の爲にし、唯だ能く之を説くなり。古の学ぶ者は人の爲には、道を行ない以て世を利するなり。今の学ぶ者は己の爲には、身を修め以て進むを求むるなり。夫れ学は、猶お樹を種うるが如きなり。春は其の華を玩で、秋は其の実を登る。講論文章は春の華なり。身を修め行ないに利するは秋の実なり。

○そもそも学問とは、益を求める手段に過ぎない。人によっては、数十卷ほどの僅かな書物を読んだ程度ですぐに自ら不遜になって目上の人をないが

しろにしたり、同輩を小ばかにしたりする者がいる。…このように学問をしたことで自分を損なうのであるならば、学問などしない方がまだましということになる。かつての学問をする人は自らのためにその足りない部分を補足しようとした。今の学問をする者は人に対してそれをただひけらかすだけである。かつての学問をする人は人に対して正しい道を実践して世の中をよくしようとした。今の学問をする者は自分のために【学びの道を歩んで】官吏になって出世することを求めている。

さて、いよいよ「学問のあり方」をめぐる教えであるが、如何であろう。現代にも通じるような教えであるが、果たして皆さんはどのような疑問や問題を抱いているのであろうか。

おわりに

以上、冗長な結果となりました。ここからは文体を変えてみたいと思います。それでは、国士舘大学文学部で学ぶことのできるのものとは、一体何でしょうか。

それは、「仁」すなわち「礼節」を備えた「文武両道」の生き方であると考えます。提題者が国士舘大学文学部に奉職したのは1986（昭和61）年4月。爾来、今2013（平成25）年9月まで、27年6箇月に亘って清代（17世紀～20世紀）ユーラシア諸領域の歴史的構造分析に関する研究と教育に携わってきました。

管見の限り、歴史上の事例から窺えることは、洋の東西を問わず、「武から文武両道をなし得た」事例はごくごく少なく、一般に「文からのみ文武両道は叶えられる」ということです。これは、旅順中学時代から大連の満鉄道場に通った縁で高野茂喜範士に師事した稀代の剣の達人（本人は段位や称号を何とも思っていませんでしたが、息子として錬士7段までは記憶しています）にして歴史学者としても34歳で日本学士院賞を受賞している亡父の教えですが、剣道歴50年の私自身は何れの道も未熟なまま、模索の日々が続いています。

「文からの文武両道」。これこそは、国士舘大学「文学部」で学ぶことのできる最も意義のある基本理念です。そしてそこからは、仁・義・礼・智の解る「東洋人」として世界に誇ることのできる「壮健なる心」の生き方が生まれます。かつて手塚治虫編『孔子』（伝記・世界の偉人2、中央公論社、1985年10月。のちに中国で中文版が北京・学術期刊出版社から1989年1月に刊行されたほか、日本でも嶋中書店から『世界の四大聖人②孔子・釈迦』に再録されて2003年9月に出版）を手伝って、資料や註記を考証し、「孔子—礼・楽・仁に生きた人」と題する巻末の解説（中文版では「孔子—爲礼、楽、仁而生的人」）を記した者として、そのことを人一倍強く受け止めています。

『孟子』「離婁篇 第四上」には、「人々が礼儀道徳を失い、不仁者が高位にいて、その側近がまた不仁者で口先だけのおしゃべりでご機嫌取りばかりをしているよ

うでは国家という組織はすぐにも滅びるしかない」ということについて、

事_レ君無_レ義、進退無_レ禮、言則非_レ先王之道_レ者、猶_レ沓沓_レ也。故曰、責_レ難於君_レ、謂_レ之恭_レ。陳_レ善閉_レ邪、謂_レ之敬_レ。吾君不_レ能、謂_レ之賊_レ。(君に事えて義なく、進退して礼なく、言えば則ち先王の道を非る者は、猶お沓沓のごときなり。故に曰く、「難きを君に責むるは、之を恭と謂う。善を陳べ邪を閉ぐは、之を敬と謂う。吾が君は能くせずとするは、之を賊と謂う」と。)君に仕えて義の行ないがなく、進退に当たっては礼を欠き、口を開けば妄りに先王の道を誇るだけの者は、口先きだけの御機嫌取りに過ぎない程度の意味しかない。それだからこそ言いたい。「難しい先王の道を君主に実行させようと強く託すこと、これを恭と言う。善道を述べて君主の邪心を閉じ込めてしまおうとすること、これを敬と言う。自分の君主には仁政などできはしないのだからとしてしまうこと、これは君主を賊害することであると言う」と。

とあります。つまり、仁徳を具えた誠の得難い部下というものは、一見すると自分の主人に逆らい、主人を追い詰めて苦しめているだけのようではあるけれども、実は真に主人を思い、組織を思い、過ちの無いようにしようと心をくだしている人達なのです。人々が礼儀道德を身に付け、仁者が高位にいて、側近もまた仁者で言うべきことをしっかりと主人に迫るようであれば、その組織が長きに亘って存続できる道はみえるということなのです。

そこで、現役生の皆さん、「国士館」創立時における「建学の精神」の実現に欠くことのできない「国士館大学文学部」の独自性について、今一度確認していただきたいと思います。その上で、まずは国士館の誇る中央図書館に行って【漢籍の古典】にチャレンジしてみてください。

「国文学」と「漢学」による正しい知識と「礼節」を身にそなえ、そこから皆さん御一人御一人が望む「学問の道」あるいは「人生の道」を始めてみては如何でしょうか。